

考古学者 原田大六論 (三)

——「日本国家の起原」の完成——

本稿は、『学苑』七六七号に掲載された「考古学者 原田大六論 (二)」のつづきであり、原田大六が福岡県糸島郡今津(現、福岡市)に居をうつした昭和二三(一九四八)年から「日本国家の起原」を完成させた昭和二五(一九五〇)年までの期間を跡づける。

なお、文中の敬称は省略し、引用文の歴史的仮名づかいは現代仮名づかにあらため、また、明かな誤字・脱字は訂正した。

一一 『弥生式時代の糸島』の執筆

昭和二三(一九四八)年春、次姉タイが糸島郡今津小学校(現、福岡市)に転勤することになり、姉家族とともに大六も今津の親戚宅に落ちついた。今津は、福岡空港駅から地下鉄にのり、姪浜あたりから地上にでたつぎの駅今宿の北、博多湾に望む地である。ここには一三世紀に中国・元軍の襲来を防ぐため、『元寇防塁』が築かれ、その遺構がいまものこる。

今津には、昭和三十一年にイトノ夫人と結婚式をあげるまで住みつづけることになるが、この間、朝倉郡三奈木村(現、甘木市)へ赴き、「三奈木歴史館」の整備に約一年間従事したため、正味七年間いたことになる。

菊 池 誠 一

姉タイの娘、育は小学校三年から中学校三年まで大六と同居していたが、そのころの様子をつぎのように記憶している。

叔父は、三部屋あったうち、三畳の二間を独占し、玄關脇の部屋には手作りの本棚をおき、たくさんの本があった。

母子三人は、八畳一間で生活をしていたのであった。また、家では、薪割りや草むしりをまったくせず、小学生だった自分がそれをした。なぜ手伝ってくれないのだろう。

と、思うときがあったという。母タイは育にこうさとした。

弟はいつかえらくなるから我慢しなさい。

次姉タイと三番目の姉フミは、ともに師範学校出の小学校教師をしており、終生、大六のよき理解者、支援者であった。その姉タイは学校での業務がたたり、教頭在職中に五一歳の若さで亡くなる。いまとは違い、女性の管理職がたいへん少なかった時代のことである。優秀な教員であった。

たとえ周囲に理解者・支援者がいたとしても、働き盛りの三〇代前半でありながら、職につかない大六に対して、周囲の眼は厳しかったであろうし、大六のような在野の学徒は、大学出の研究者からも冷たい眼差しでみられていた。そうしたことも原因であったのだろうか、ときたま虫のいど

ころが悪くなる場合があったらしい。育は、

叔父はよく食卓をひっくり返した。あるとき、叔父が母を殴ろうとしたので、それをとめたこともあった。

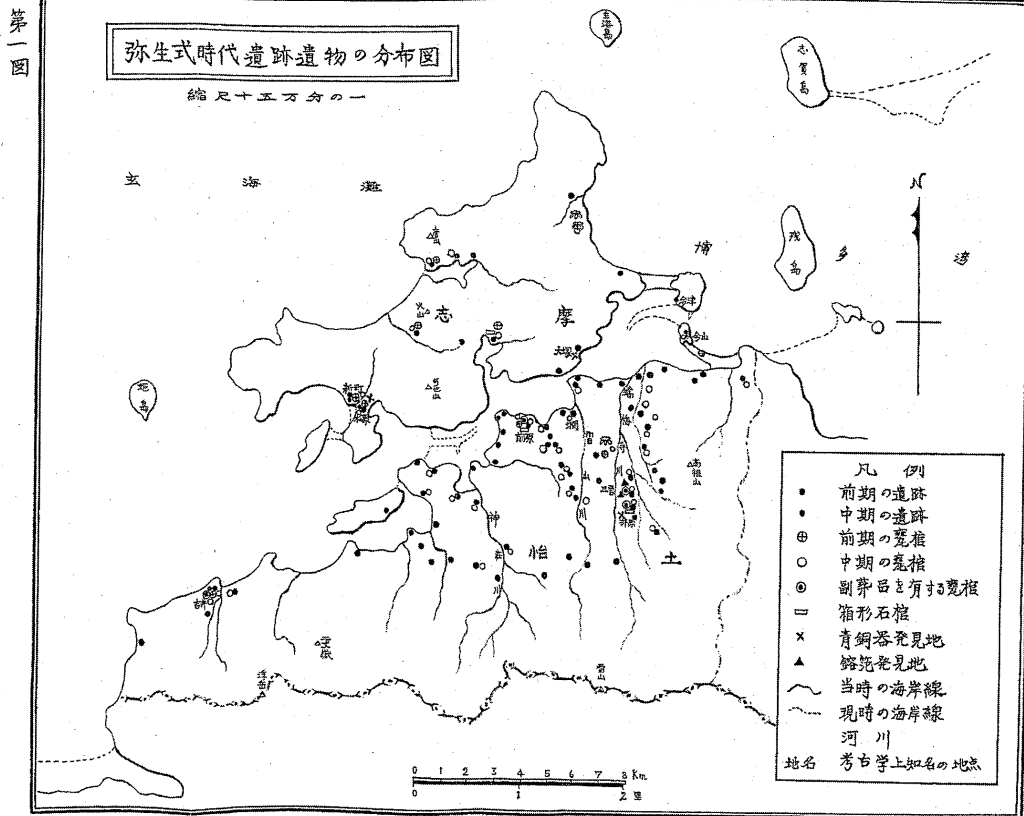
と、いう。しかし、

カバンに絵の具でリンゴやブドウ、般若の面などを描いてくれたり、火鉢を囲んで餅を焼きながら、幽霊の話をしてくれたりと、優しい面もあった。そして、なによりも印象深いのは、

丹前を着て本を読んでいる姿、朗々と本を読んでいる声、という。

昭和十三年、大六は「弥生式時代の糸島」を脱稿した。表紙をつけ和綴じされた原稿が今も書庫に保管されている。四〇〇字詰め原稿用紙で二一〇枚、それに四枚の「糸島郡地方弥生式文化時代遺跡遺物発見地名表」がつく。⁽¹⁾ 挿図は手書きでありながらも、うつくしくみごとなものである。遺跡や遺物とともに、糸島の先史時代から弥生時代への流れを少年・少女むけに書き下ろしたもので、章立てはつぎのとおりである。

第一章	糸島の先史時代
第二章	遺跡と遺物
第三章	遺跡
第四章	遺物
第五章	王様と氏上のおこり
第六章	年表
第七章	遺跡遺物発見地名表
第八章	郷土室



「弥生式時代の糸島」の手書き挿図

第九章 糸島弥生時代研究小史

第十章 文献

第十一章 むすび

とくに、第八章の「郷土室」では、学校に郷土室をつくると楽しいと語り、そこで収集したものを整理し、村の歴史を考え、書いてみることを提案している。そして、「自分の足でその遺跡を見てみようとするうちに学問の面白さや、真面目さがわかってきます⁽²⁾」とのべる。大六は、論文以外にも少年・少女むけに原稿を書くことがあった。その背景には、大六自身が旧制中学生のころ、恩師安河内先生の腰巾着となって糸島の山野を跋涉し、考古学にのめりこみ、学ぶことのたのしさを知った体験があったからであろう。

一二 わが国における最初の支石墓発見

中山平次郎宅にでかけその講義を聴き、中山説の体系づけをおこなうために論理学を、マルクスやエンゲルスの著作からは史的唯物論をまなび、さらに原稿執筆、遺跡踏査と寸暇を惜しんで勉強していた大六は、昭和二四（一九四九）年一月九日、日本考古学史上重要な発見をした。

それは、わが国ではじめてその現存が確認された支石墓（当時は、ドルメンともよばれていた）であり、大六は、井田（現、前原市）在住の友人、井上勇の協力をえて糸島郡怡土村三雲曾根の石ヶ崎（現、前原市）で発見したのであった。大六にとっては自説を検証できる遺跡の発見であり、日本考古学史上にとっては弥生時代墓制研究の発展をもたらす遺跡の出現で

あった。

支石墓とは、ヨーロッパから東南アジア、東アジア地域にも分布する先史時代の巨石記念物のひとつで、数個の石で蓋石をささえる墓である。とくに中国東北部から朝鮮半島、そして西北九州に分布する支石墓には三形態あることが知られている。西北九州には朝鮮半島南部に分布する碁盤形支石墓とよばれるものを祖形とし、埋葬施設に箱式石棺や木棺、甕棺などをもちい、地上に支石をおき、その上に扁平な大石をのせるものがおい。

日本におけるその出現時期は、縄文時代晩期、あるいは弥生時代早期の夜臼式期^{（3）}とよばれる段階であり、その分布は現在のところ、糸島地方を中心に佐賀県から長崎県と同心円的に分布している。弥生時代前期になると北部九州では土坑（木棺）墓や甕棺墓がつくられ、支石墓は衰退し、中期後半には北部九州の周辺部に地域的残存現象としてみられるにすぎない。^{（4）}

アジアの支石墓については、戦前に中国東北部などで調査をした鳥居龍蔵や、朝鮮で支石墓の発掘調査をした小泉頭夫らによる研究がある。日本においては明治時代に須玖岡本D地点の大石と立石（現、福岡県春日市）の報告はあったが、これは明確に支石墓とは断定されなかった。また昭和一〇（一九三五）年に鏡山猛が糸島郡北崎村（現、前原市）の小田^{（5）}において、破壊された後の調査ではあったが、支石墓と認定された遺構があった。しかし、現存する遺構としての支石墓の存在は、戦後の大六と井上勇の発見をまつまで知られていなかったのである。

では、石ヶ崎支石墓の発見のいきさつを、大六の『筆写ノート 戦後』と題されたノートからみてみよう。^{（6）}

昭和二十四年、正月気分もまださめやらぬ一月八日、大六は民俗学を熱心に勉強していた井上勇を訪ねた。しかし不在であったため、近くの三社神社にたちより、御子守石とよばれる扁平な大石と「潮井石」に使用されていたとされる花崗岩の大石をみて、北朝鮮の「ドルメン」を思わせるに充分であった」と考えた。そして、再度、井上勇を訪ね、在宅したかれにその石の由来を尋ねた。ふたりの会話はつぎのようにつづく。

井上「あれは用会といって私の畠の近くから持ってきたものですよ。」

大六「そこは自然石の露出している所ですか。」

井上「いいえ、沖積台地ですよ。」私は少々あせり出した。(中略)

大六「いや、やっぱりドルメンだ。ドルメンと思うのです。」

その日は、夜半まで井上とドルメンの話になり、大六は井上宅に一夜することになった。翌日、ふたりは潮井石のあったという地点にいったが、

なんの痕跡もえられなかった。

近くの古老に尋ねると、

大石なら「石ヶ崎」という所にも潮井石位の石はありますよ」と教えられ、い

さんで目と鼻のさきの台地にむ

かった。ひとあしききに台

地にかけのぼった大六は、

ドルメンだ。井上さん

ドルメンですよ。立派

なドルメンと私は思う。

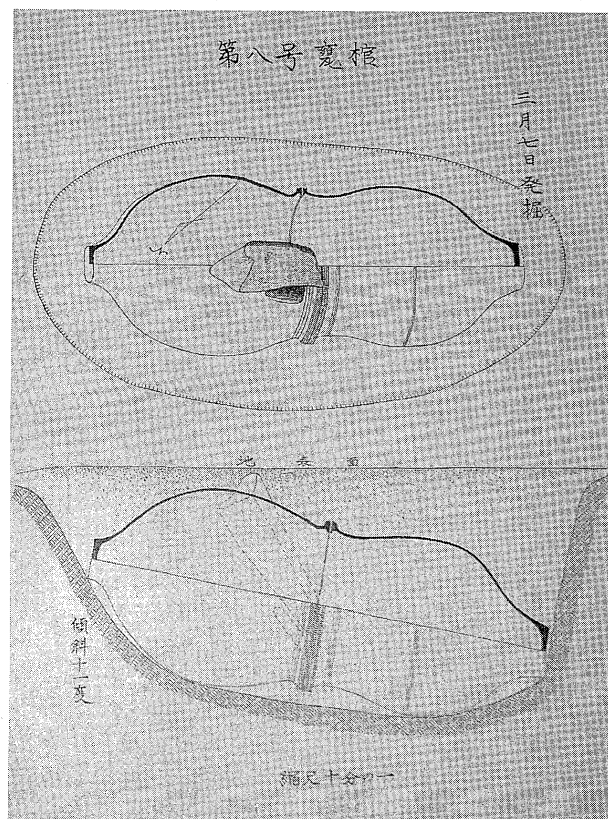
と、何度もさげんだ。



石ヶ崎支石墓 (左が原田大六、右が糸島高校生)
1949年3月11日撮影

その後、大六は支石墓かどうかを確認するため、昭和二十四年の一月後半から後輩にあたる糸島高校生の応援をえて試掘調査を開始した。この発見は、二月一九日付けの地元の新聞『糸島新聞』に報じられ、これが新聞に大六の名が登場した最初の記事となった。そして、この遺跡の試掘調査をしたことが、当時、福岡高校の教員で県の史跡調査委員をしていた考古学研究者の森貞次郎(後に、九州産業大学教授)との間で不協和音をおこすことになった。ことの顛末はつぎのとおりである。

大六は九州考古学会員の中原志外郎を介して一月二八日に支石墓発見の報を森貞次郎へ連絡、一方、九州大学の鏡山猛にも書簡をおくった。森は翌二九日、遺跡を訪れ、県の史跡調査委員という肩書きもあったのであろうが、大六の試掘を「盗掘」とみなし、試掘にあたった者の名を連記し、県当局に報告した。後日、県から糸島高校に「学生の乱掘をつつしんでも



石ヶ崎遺跡第八号支石墓の図面 (原田大六の図面帳から)

らいたい」との注意となった。

この試掘調査をめぐる森の行動に対し、大六は不信感をいだいたものの、正式な発掘調査をするために、森貞次郎や九州軍政部民間教育課に勤務していた有光教一（後に、京都大学教授）と共同調査を実施することになった。二月一八日に開始し、四月一八日までつづけられた。⁽⁷⁾かれらとの調査は、共同とはいっても協同ではなかった。「あくまで自己の研究する学の為に別個な方向に進むこと」をかれらと約したのであった。

この間大六は、毎朝、空の弁当箱をさげ、今津からおよそ一〇kmの道のりを歩いた。そしてまず井上宅に立ちよって、弁当箱にご飯をつめてもらい、発掘道具をもって現場にむかった。大六はカメラをもっていなかったため、撮影を写真屋に依頼し、当時の金で一万数千円を支払ったという。⁽⁸⁾おそらく、資金は教員をしていた姉たちが工面したものであろう。

大六はその調査成果を「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」と題して翌年に執筆し、それは昭和二七（一九五二）年に『考古学雑誌』の巻頭に掲載された。その編集後記に「その綿密な調査と研究はこの遺跡が支石墓をも含んで居るという特殊性により一層この報告論文を意義あらしめて居る」⁽⁹⁾と評価されたように、その報告文はアマチュアのなせるわざではなかった。

その報告文によると、遺跡から支石墓一基と甕棺二三基、土坑三基の計二七基の遺構が検出された。遺物により時期をおおきく四期にわけ、それぞれの遺構を詳細に報告。第四期に位置づけた支石墓は長さ二・二m、幅二・一m、厚さ〇・六mで、なかから碧玉製管玉が一点出土した。ただし、試掘時に投げだされた土からさらに一点がみつかっており、合計は二二点となる。考察では、甕棺の傾斜と方位について、そして、北部九州弥生

文化の墳墓研究の課題である、支石墓や甕棺の外部施設、つまり土盛があったか否かの検討をくわえている。甕棺にかんしては盛土の存在を推定し、支石墓にかんしては巨岩を指標と考え、盛土の存在を否定した。支石墓の時期と、こうした考察をくわえて、最後に石ヶ崎遺跡を「甕棺の日本独自文化と支石墓の外来文化が入混った多彩なかげに、一個人の墳墓に多大な労力を支払いはじめた事実が看過すべきではなからう」⁽¹⁰⁾とむすんだ。大六は明かに、北部九州弥生社会において、階級差の出現をこの遺跡にみたのであった。

ところで、大学で考古学を学んだ研究者がたいへん少なかった当時、かれらはおうおうにして、大六のように独学で学ぶ在野の学徒をみくだすことがあった。戦後、旧石器時代の人類遺跡をはじめて確認し、日本考古学史上の大発見となった岩宿遺跡でも、その発見者である相沢忠洋を軽んずる動きがあったが、これもその一例であらう。

当時、九州考古学会員となっていた大六は、研究会などで自説を披露するが、会員からは「大づかみな粗悪なイデオロギーに支配された研究より、ジミな仕事をこつこつと続けて行くのが学徒としての使命だ」⁽¹¹⁾と相手にされなかった。「粗悪なイデオロギーに支配された」大六が遺跡踏査という地道な仕事で大発見をしたため、森の対応にはそのとまどいとともに、県の史跡調査委員として自ら責任者となり、調査をしたい気持ちがあったのであろう。大六にとって最初の学史にのこる発見は、祝福されたものではなかったようだ。

石ヶ崎支石墓の発掘調査が終了した翌月に、大六は考古学者和島誠一に一通の手紙をおくった。⁽¹²⁾それは、渡部義通におくった原稿「古墳文化の前後―日本原始共産社会の崩壊期」が渡部から和島のもとにおくられていた

ことを、渡部の返書で知り、感激したからであった。前号で紹介したように、和島は渡部義通とともに戦前から皇国史観に反対し、科学的歴史学研究を推進した数少ない良心的な研究者であった。

大六は手紙のなかに、石ヶ崎支石墓調査をめぐる顛末や、そのこともあって九州考古学会に嫌気がさしたことを、そうしたとき和島の「原始聚落の構成」⁽¹⁴⁾を読み感激したこと、さらに、上京し日本国家の起源にかんする自説の紹介や支石墓調査の報告をしたい旨を記した。これが、和島との最初の接触であった。

一三 井上勇との出会い

ところで、石ヶ崎遺跡発見の協力者であった井上勇（明治三十八年生まれ）とは、どのような人物であろうか。石ヶ崎遺跡発見時、まだ少年で大六のことを「山掘りおじさん」とよび、井田（現、前原市）で農業を営む勇の長男、井上哲（昭和七年生まれ）によれば、

父は、旧制中学校（現、福岡市西南高等学校）を中退し、当時（戦前）、アメリカに出稼ぎにいった両親のもとにいき、約五年間滞在したが、目を患い帰国。一時、熊本県庁に勤めたものの続かず、その後鍼灸師の免許をとり開業。これもうまくゆかず、戦後は、百姓をすることになった。作家になりたかったらしい。また、民俗学や方言に関心をもち、実地調査にもでかけることがおおく、農業の仕事はあまりしなかった。まわりからは、変人あつかいされていた。

と、いう。旧制中学校を中退した背景には、学校の成績はたいへんよかったものの正義感がつよく、それが災いして一部の教員から疎まれたことが

一因であつたらしい。敗戦時には、進駐軍の通訳にかりだされたり、戦後間もなく、『糸島タイムス』⁽¹⁵⁾の新聞記者になったこともあった。

その勇は『糸島新聞』に掲載された大六の最初の公表文「地名上から見た郷土糸島史」⁽¹⁶⁾を読み、執筆者大六に会いたいと糸島新聞社に立ちより、大六の住所を訊いたことがあった。対応した者が、

原田さんはヘンな人ですよ。

と、いったところ、かれは

原田さんがヘンな人か、どうかを訊いているのではない。住所を訊いているのだ。

と、一喝したことがあった。大六と同じ、一本気な男であった。これが大六との最初の出会いであった。

その井上勇と大六は、お互いの境遇が似ていることや、ともに研究意欲が旺盛であったため、意気投合した。大六にとっては、一二歳上のよき兄貴的存在でもあった。ともに独学とはいえ、真から学問を語りあえる者同士と互いにみとめあう仲であった。

井上哲は、

ふたりは、仕事をせんで、あっちこっちにいったって糸島の遺跡をほとんど調べてしまった。

と、いう。勇の夫人ミサオは九〇歳をこえたいまも元気で、当時を懐かしがる。

ふたりとも努力家だった。あるとき、大六さんが正月にきてお雑煮の餅を三〇個も食べていったことがあった。

ミサオ夫人はあきれたが、大六は「自分は食いためができるんです」といったという。農家以外は食糧の乏しかった時代のことである。

井上勇は大六の欠点も熟知していた。

君のもつ直情径行性も相当損をしよう。よく喧嘩もするが、理屈がわかればまた恬然として悔いない。⁽¹⁷⁾

井上哲の記憶でも何度か父とケンカをしたことがあり、それでも「何日かすると、大六さんは寂しくなって父を訪ねてきた」という。哲が記憶しているケンカで印象深いのは、論文の書き方をめぐる言い争いであった。

父は、

大六の論文は「……である」と断定調であるが、どうして「……でなかろうか」と書かんのか。

と、いったという。これが原因でいつとき往来はなかったらしいが、いつとはなしに、「また大六さんは家に出入りしていた」という。

井上勇は、その後も大六のよき理解者となり、終生支援をおしまなかった。この人物の存在なしには、当時の大六の踏ん張りはなかったかもしれない。井上宅には、勇がのこした写真帳や日記が保管されており、若き日の大六の活動のようすを知る手がかりがそのなかにあった。

一四 「日本国家の起原」の脱稿

昭和二四（一九四九）年四月、考古学にかんする最初の公表文「考古学上から観た糸島の農耕文化」⁽¹⁸⁾を『糸島新聞』にのせると、かれは自説の完成をめざし、「古墳文化の前夜―日本原始共産社会の崩壊期」の改稿作業にとりかかった。これが執筆完成から二五年後に三一書房から刊行された『日本国家の起原』である。

大六の自宅書庫には「古墳文化形成過程の研究」と書かれた箱があり、

なかには「日本国家の起原」と書かれたA五判無地のノート一三冊と無題の二冊のノートがおさめられ、その第一冊のノートには「改稿 国家の起原―弥生古墳両文化の社会史的考察に寄る日本国家起原の研究 一九四九・六・二二 起稿 原田大六」と墨書きされている。縦書きの細かいペン文字でびっしりと紙面を埋めているこのノートは、原稿用紙に清書するまえの下書きであろう。

原稿完成は、翌年の五月ころであった。四〇〇字詰め原稿用紙にして一〇〇〇枚。およそ一年間で書きあげたことになる。単純計算しても、一日に三枚の執筆である。この間、執筆だけに明け暮れていたわけではない。中山平次郎の講義を聴き、井上勇とは議論をし、遺跡踏査をもくりかえしていたのであった。

ところで、完成した「日本国家の起原」はつぎのような章立てである。

自序

- 第一章 日本考古学の成果
- 第二章 考古学理論の確立
- 第三章 北部九州弥生社会の構造
- 第四章 祭器化された青銅器
- 第五章 放失された青銅器
- 第六章 副葬された品々
- 第七章 弥生式文化研究の基準
- 第八章 資料的階層への整理
- 第九章 地域的階層の確認
- 第十章 社会の飛躍性と停滞性

- 第十一章 独占された門戸
- 第十二章 二社会文化の背反性
- 第十三章 社会と墳墓
- 第十四章 銅鉄文化の交替
- 第十五章 原始共産社会を持続するもの
- 第十六章 氏族制度を強力化していったもの
- 第十七章 古墳文化解明の鍵
- 第十八章 副葬品の変遷
- 第十九章 古墳内部構造の変遷
- 第二十章 古墳外部構造の変遷
- 第二十一章 古墳文化の構成
- 第二十二章 征服戦

この章立てを、一七章で構成された「古墳文化の前夜―原始共産社会の崩壊期」(以下、本章ではこれを前稿とよび、「日本国家の起原」を後稿とよぶ)とくらべると、後稿は全体で五章ふえたことになる。まず、後稿の第一、第二章が前稿の第一章にあたり、後稿の第三章から第六章までが、前稿の第二章から第五章までとはほぼ同じ内容で若干の題名の変更がみられる。後稿の第七章は、新しくつけ加えられ、第八章から第十六章までは、前稿の第七章から第十五章にあたり、若干の題目の変更、たとえば後稿の第十章「社会の飛躍性と停滞性」は前稿では「漁獵共同体より農業共同体へ」という題となっている。そして、第十七章から第二十一章までが前稿にはなく、後稿第二十二章が前稿の第十六章にあたる。

このように、「日本国家の起原」は「古墳文化の前夜―原始共産社会の

崩壊期」を基礎としながらも、内容的にも、字数的にも大幅にふくらみ、「原田学説」の完成をみている。

世にいう原田学説とは、遺跡と遺物を、形態や材質ではなく、用途と所有から分離し、弥生時代の社会前進の不均等、つまり弥生時代における北部九州の優位性を明かにし、北部九州の弥生時代の墓制と古墳との間に類似性があることを指摘し、その移行と飛躍は北部九州から近畿への征服戦にもとめ、その結果として古墳文化が畿内に成立し、その支配の象徴物として、甕棺とそれをうけた長首壺に原型のある前方後円墳が誕生した、というものである。^(19, 20)

この「日本国家の起原」を脱稿すると、師である中山平次郎はことのかよろこび、

君もとうとう専門家になったよ。⁽²¹⁾

と、お墨つきをあたえたのであった。学びはじめてから三年がたっていた。

一五 民主主義科学者協会の誕生と「日本国家の起原」

戦前、軍国主義体制のもとで強力に戦争政策をおしすすめ、破滅への道を邁進した日本は、左翼的結社や民主的な人物を弾圧した。皇国史観を否定し学問の科学性をまもった渡部義通らは、そのため治安維持法で検挙、投獄された暗黒の時代であった。

敗戦を契機に、渡部義通たちは日本の民主的な変革を実現するべく、進歩的な科学者たちを糾合するための組織づくりに奔走した。そして、昭和二一(一九四六)年、東京芝の日本赤十字社講堂で「民主主義科学者協会」の創立大会をひらき、ここに略称「民科」が誕生した。この活動の中核を

になった研究者のなかに、日本中世史の石母田正や日本古代史の藤間生大らがいた。⁽²²⁾

渡部は、大六に返書した昭和二四（一九四九）年に日本学術会議会員を辞し、日本共産党から衆議院選挙の埼玉第一区に立候補し当選していた。渡部自身は、学問の場を離れたことを後悔し、国会議員としては「落第点であったと思う」⁽²³⁾と後年、述懐した。

大六は「日本国家の起原」を脱稿した翌月、かつて和島誠一に希望していた東京での発表の願いはかなえられ、上京し、和島誠一宅に一ヶ月間ほど滞在した。民主主義科学者協会主催で「日本国家の起原」について同本部で二回、東京大学山上会議所で一回、講演する機会があたえられたのである。聴衆のなかに、日本古代史の井上光貞や藤間生大、考古学の大場磐雄らがいた。講演が終わったあと、和島は、

原田はひどいヤツだ。九州の野人がポンとやってきて、東京で古代史や考古学をやっている学者達の頭のなかに「原田大六」の名を植えてしまった。⁽²⁴⁾

と、語ったという。

この講演の合間をぬって、大六は東京国立博物館にたちより、考古課長の八幡一郎（後に、東京教育大学教授）に石ヶ崎遺跡の支石墓から出土した碧玉製管玉二点を寄託し、実測図などで詳細に遺跡の説明をした。八幡は、

私は原田氏の調査の綿密周到だったのに敬服すると共に、その遺構の有つ考古学的意義の重大さを教えられ芸術大学に同氏を伴って藤田（亮策）教授と共々反復その説明を聞いた。その時これを学会に報告したいと慫慂したところ快諾され、⁽²⁵⁾

と記し、この報文がさきに紹介した大六の『考古学雑誌』に掲載された「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」であった。

大六は「日本国家の起原」の出版協力を和島に要請し、和島は当時、明治大学教授で古墳時代研究者の後藤守一に原稿の検討を依頼した。しかし、後藤の机の上に一年間も放置されたままであった、⁽²⁶⁾という。翌年、原稿は返却され、出版にはいたらなかった。このことは、大六に深い失望とその後の生き方におおきな影響をあたえた。ことの顛末と原田学説の日本考古学史上の位置づけは、次号以降であらためてのべたい。

一六 「円筒埴輪の構成」と長浜貝塚の発見

東京から糸島にもどった大六は、さっそく『糸島新聞』に「日本考古学上に於ける糸島の地位」⁽²⁷⁾を公表した。このなかで、

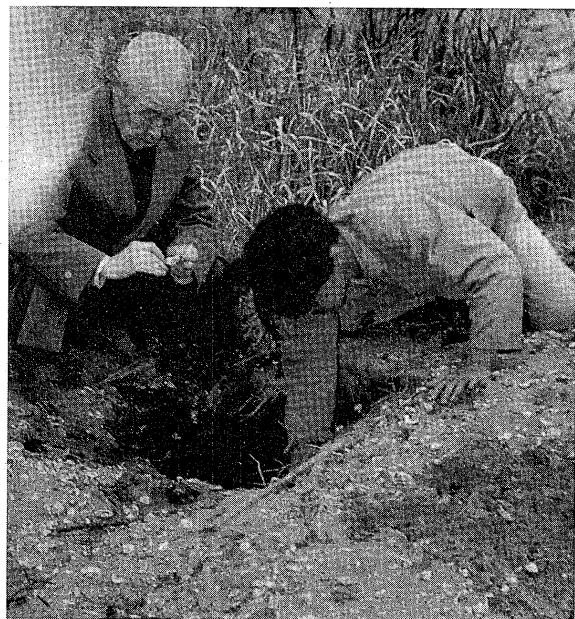
東京に於ける発表会から帰り何より幸福に思つたのは私がこの糸島に生まれたことでありそして糸島のことなら誰にも劣らぬ理解と情熱を持っていたことです。

と、書き起こす。そして、

糸島郡が一躍考古学会にも古代史学にも又古代文学上にもデビューする事になる地盤だけは中央学会で作つて来た

と、のべる。「民科」の研究会で大六は、純粹に考古学資料から日本の国家起源を語っただけではなかったようだ。神話も語ったようである。

ドルメンのような巨石文化と天岩戸物語、鏡と剣と玉の文化と三種の神器。巴形銅器と日神信仰、腕輪に現出した陰陽思想と国生み物語等は考えさせられる多くの持つてゐるのではありますまいか。



長浜貝塚での原田大六（右）と中山平次郎

とも、その記事のなかで語っている。皇国史観から脱し、科学的な歴史学を構築しようとする戦後の学界の動きのなかで、考古学的事象と日本神話を結びつけることに違和感をもつ研究者がいたとしても、不思議ではなかったところである。

昭和二五年七月、大六は埴輪の起源問題に一石を投じる論文「円筒埴輪の構成」を執筆した。円筒埴輪とは、古墳の墳丘の上に樹立された円筒形の埴輪で、当時は、その起源がわからず研究者を悩ませていたのであった。この論文を、東京国立博物館に事務局をおく日本考古学会におくったが、発表がなかなかされないことから返送してもらったことがあった。

現在、大六の自宅書庫に「円筒埴輪の起源」と題された第二稿から第七稿までの原稿がある。何度も推敲をかさね、第七稿の原稿は、四〇〇字詰めにして五〇枚である。その内容は、近畿の古墳文化に出現する円筒埴輪

と北部九州の弥生文化の甕棺（大六の命名した『福井式甕棺』）を、近畿の供献用としての器台形土器との類似点と相違点にわたり比較し、その複合が円筒埴輪、つまり「死骸を葬らぬ供献的棺」と考えたのである。北部九州の甕棺と畿内の土器の融合の背景には、原田学説である北部九州勢力の畿内征服による古墳文化樹立の歴史観があった。残念ながら、この論文は公表されることはなかったが、その考え方については、四年後の処女出版『日本古墳文化―奴国王の環境―』（昭和二九）のなかでふれたものの、⁽²⁸⁾当時はおかたの支持をえられなかった。しかし、昭和四二（一九六七）年に発表された近藤義郎・春成秀爾共著の「埴輪の起源」のなかでは、

埴輪起源に関するこの考え（原田説―筆者）は、弥生時代後期における埋葬および供献用器物の政治的・儀礼化的展開のうち埴輪の起源をときあかそうとした考古学者の試みとして、画期的な意味をもち、また形態論的に着想においてもすぐれ、全体として円筒埴輪の本質への接近を促がす役割をはたした。⁽²⁹⁾

と、好意的に評価された。

しかし、近藤・春成の見解によれば、円筒埴輪の起源は、その形態から弥生時代後期に吉備地方（現在の岡山県から広島県東部）で作られ、墳墓に使用された特殊な土器、つまり特殊器台から発展したもの、とされる。特殊器台はその上に特殊壺をおき、その発展したものが朝顔形埴輪になるが、ともに墳丘への樹立は「飲食物供献儀礼の高度に抽象化された形象」として、⁽³⁰⁾「吉備地方で誕生した円筒埴輪を畿内諸勢力がうけいれ」た、との考えをしめした。これが、現在では定説となっているようだ。

しかし、岡本明郎はその形態変化を是認したうえで、特殊器台の性格を『壺』をのせる台ではなく『棺』であったとし、「壺と器台の関係は、

壺が生命の再生する場所であったのに対して、器台は再生した靈魂の宿る所、あるいは靈魂そのものであったろう⁽³¹⁾と考える。この考え方の背景に原田説の影響がよみとれる。岡本は筆者への私信のなかに、

「はにわ論」を本格的に展開できたのは、大六先生の九州弥生遺跡墳墓における土器供献の分析があったからです。私は後に『はにわ』はなぜつくられたか⁽³²⁾（『考古学研究』）のなかでそのことを紹介しようとしたのですが、その後の若い人の研究には不十分にしか継承されていないように思われ残念です。

と、語った。原田説は、その形態論からはなりたたなくなったが、埴輪の象徴性においてはまだ研究史上に命脈をたもっている。

ところで、大六はこの間、原稿執筆にあけくれるだけではなく、遺跡踏査も頻繁におこなった。昭和二五（一九五〇）年十一月一日、大六は中原志外頭とともに自分の居住地、今津で長浜貝塚を発見した。そのとき、簡単な試掘調査をし、出土した土器（壺、甕）を生まれてはじめて復元した。その土器は現在、糸島高校の博物館に展示されている。この長浜貝塚は、弥生文化の遠賀川式土器を出土する貝塚としてめずらしく、その後、原田の連絡をうけた和島誠一や近藤義郎らが発掘調査を実施したものの、報告はとうとう公表されることはなかった。

昭和二三（一九四八）年から昭和二五（一九五〇）年までのわずか三年間に、大六は論文「弥生式時代の糸島」をはじめ「日本国家の起原」、「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」、そして「円筒埴輪の構成」をたてつづけに執筆、四〇〇字詰め原稿用紙で一二二〇枚にのぼる。一年間に約四〇〇枚書いていた計算である。それぞれの論文は、日本考古学史上にのこ

るものであり、そればかりではなく、重要な遺跡の発見をしたことでも特筆される。こうした大六の努力と熱心さは、一方、九州在住の考古研究者との間に軋轢をうんだことも事実であり、その後、大六は中央の学界との接触をはかっていく。

最後になったが、本稿を執筆するにあたって、イトノ夫人をはじめ、原田祥司氏、森田育氏、渡辺正気氏、清水鐵生氏、若宮義次氏、岡本明郎氏から貴重な証言を伺うことができた。記して、感謝申し上げたい。

註

- (1) 原田大六 一九四八「弥生式時代の糸島」。未刊行。この原稿は、「原田大六先生年譜」（『原田大六論』）によると、同年六月中旬に脱稿とある。起稿は不明であるが、一九五〇年に執筆され、一九七五年に刊行された『日本国家の起原』の序文には「弥生式時代の糸島」が「古墳文化の前夜―原始共産社会の崩壊期」の前に書かれたことになっている。しかし、さきの年譜や原稿の奥付の日付から、筆者は「古墳文化の前夜―原始共産社会の崩壊期」の後に位置づけた。
- (2) 註(1)の一九六頁。
- (3) 西谷正 一九八〇「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジア世界における日本古代史講座一』学生社。
- (4) 岩崎二郎 一九八七「支石墓」『弥生文化の研究』第八巻、九一―九七頁、雄山閣。
- (5) 乙益重隆 一九九〇「日本における支石墓研究の歴史」『アジアの巨石文化―ドールメン・支石墓考―』一八三―二〇五頁、六興出版。
- (6) 『筆写ノート 戦後』は、大六が新聞に執筆した記事や手紙の下書き、

論文等の引用文からなる。

- (7) 原田大六 一九五二「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墓地」『考古学雑誌』第三八巻第四号、一〇三三頁。
- (8) 井上勇 一九五二「原田大六論」『糸島新聞』二月二日付け記事。
- (9) 曾野寿彦 一九五二「編集後記」『考古学雑誌』第三八巻第四号。
註(7)の三三頁。
- (10) 原田大六が和島誠一におくった手紙の下書きによる。これは、『筆写ノート 戦後』のノートになかにおさめられている。
- (11) 和島誠一にあてた手紙の下書きによる。
- (12) 「考古学者 原田大六論(二)」のなかで、渡部からの返書があったのか否か、と筆者はのべたが、その後の調べでたしかに渡部からの返書はあった。しかし、大六の自宅書庫を調査中であるが、まだ渡部の手紙は未発見である。
- (13) 和島誠一 一九四八「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』学生書房。
- (14) 『糸島タイムス』は中村惣次郎を社長に、井上や大六がかかわった新聞社。わずか四、五年で廃刊したという。
- (15) 原田大六 一九四七「地名上から見た郷土糸島史」『糸島新聞』一月一八日付け。
- (16) 註(8)と同じ。
- (17) 原田大六 一九四九「考古学上から見た糸島の農耕文化」『糸島新聞』四月二日付け、四月九日付けの二回連載。このなかで、大六は古墳の起源を「支石を塚の内部主体とし外形に甕棺の形状を以てした此の墳はこそは家父長的家族を強力な血縁で形成し鏡と剣と玉なる貴族の印章を持ち神話に反映した神武東征神話の北筑紫甕棺築造住民の大和征服の象徴ではなかったか。幾多の反撃に逢いながらその実際を証せんとしてこの郷土糸島の原始文化財と取り組んで来た苦勞が石ヶ崎の地の発掘調査に
- よつて一層裏書きされて来たことを喜びながら」と稿をむすんでいる。
- (19) 原田大六 一九七五『日本国家の起原』三一書房、「自序」を参照。
- (20) 近藤義郎 一九六六「古墳発生をめぐる諸問題」『日本の考古学 古墳時代下』三六二頁、河出書房。
- (21) 原田大六 一九六六『実在した神話』八四頁、学生社。
- (22) 渡部義通述、ヒアリング・グループ編 一九七四『思想と学問の自伝』三一〇〜三三六頁、河出書房新社。
- (23) 註(22)の三四一頁。
- (24) 夕刊フクニチの昭和五〇(一九七五)年一月六日から二月五日まで連載された「原田大六伊都国を掘る」と題された一月一八日付け記事による。
- (25) 八幡一郎 一九五二「北部九州ドルメン見聞記」『考古学雑誌』第三八巻第四号、八六〜八七頁。
- (26) 註(24)の一月一八日付け記事。
- (27) 原田大六 一九五〇「日本考古学上に於ける糸島の地位」『糸島新聞』九月二日付け。
- (28) 原田大六 一九五四『日本古墳文化―奴国王の環境―』二四八〜二五〇頁、東京大学出版会。
- (29) 近藤義郎・春成秀爾 一九六七「埴輪の起源」『考古学研究』五一号、一三〜三五頁。
- (30) 註(29)の三二頁。
- (31) 岡本明郎 一九八一「『はにわ』はなぜつくられたか」『考古学研究』一〇九号、七九〜九八頁。
- (32) 二〇〇四年四月二三日付けの筆者への私信。